

## (第二十五章)

それに対する反論を斥ける>涅槃を考察する>章の著述を説く> [反論]

ここに言う。

「もし、これら全てが空であるならば、  
起こることは無く、壊れることは無い。  
何を捨て去り、滅すことより、  
涅槃<sup>1</sup>へ至ると主張するのか。 1

「もし、これら全ての衆生が空であるならば、そう見れば起こることは無く、壊れることは無い。それらが無い故に、何を捨て去り、滅すことより、苦しみより超越する（涅槃を得る）だろうと主張するのか。（何故ならば）捨て去ることと滅すことは不合理である故である。それ故に、そのようではない。空でなければ、煩惱を捨て去り、蘊が滅すことより涅槃を得るともなるだろう。」

章の著述を説く>返答> [事物が本性として成立した説には涅槃が不合理である]

ここで説く。

もし、この全てが空でないならば、  
起こることは無く、壊れることは無い。  
何を捨て去り、滅すことより、  
涅槃へ至ると主張するのか。 2

もし、これら全ての衆生が空でないならば、そう見れば起こることは無く、壊れることは無い。それらが無い故に、何を捨て去り、滅すことより、苦しみを超越する（涅槃を得る）だろうと主張するのか。（何故ならば）捨て去ることと滅すことは不合理である故である。そう見るので、この次第によって涅槃は不合理であると理解したまえ。

---

<sup>1</sup> 涅槃：苦しみが無くなること。また苦しみの源である煩惱が無くなること。  
一般に、涅槃には二種あり、煩惱を滅した者が生きている間の涅槃を（その者の心と体の余りが有る）有余涅槃、煩惱を滅した者の死以後の涅槃を（その者の心と体の余りが無い）無余涅槃という。無余涅槃について、仏教小乗学派（説一切有部・経量部）と唯識随教行派（唯識派の一部）は、「無余涅槃を得た時に、その者の有為（心身等、事物としての）本質的継続が断滅され、無くなる」と主張する。唯識正理派・中観派は、無余涅槃を得ても意識の継続はあるとする。

返答> [自説によって涅槃を認識する]

「ならば如何様なものか」といえば、

捨て去ったこと無く、得たこと無く、  
断滅は無く、恒常は無く、  
滅は無く、生は無い。  
それが涅槃であると主張する。 3

それ故に、涅槃の性相とはそのようであると考慮される。

返答> それより他の方法で語ることを否定する> 涅槃が四つの極辺として成立したことを否定する> 涅槃が事物として有る・無いの、それぞれの極辺を主張することを否定する> [涅槃は事物の極辺であるとの主張を否定する]

また他にも、

涅槃は事物ではない。  
老死の性相を持つ背理となる。  
老と死去と死の無い、  
事物は有るのではない。 4

先ず涅槃とは、一切の様相においても事物ではない。もし事物であるとなれば、老死の性相を持つものである背理となるだろう。何故かといえば、老死の無い事物は有るのではない故である。

また他にも、

もし、涅槃が事物であるならば、  
涅槃は有為となる。  
有為ではない事物は、  
何も、如何様にも有るのではない。 5

もし、涅槃が事物であるならば、それ故に涅槃は有為となる。何故かといえば、有為ではない事物は何も、如何様にも有るのではない故である。

また他にも、

もし、涅槃が事物であるならば、  
如何様にその涅槃は依拠したものではないのか。  
依拠してでない事物は、

## 何も有るのではない。 6

もし、涅槃は事物であると主張するならば、涅槃を「依拠したのではない。」と言ったことは不合理である。何故かといえば、依拠したのではない事物とは、何も有るのではない故であり、そう見るので、涅槃は事物ではない。

涅槃が事物として有る・無いの、それぞれの極辺を主張することを否定する>

[無事物の極辺であるとの主張を否定する]

ここで言う。「ならば、涅槃は事物ではない。」

ここで説く。

もし、涅槃が事物でなければ、  
無事物が如何様に適うとなろうか。

仮に、涅槃は如何様にも事物であるとならなかったことから、無事物でもない。何故かといえば、事物が良く成立したならば無事物も良く成立するとなる故である。

『根本中論』の解説、ブッダパーリタ。第十、最終巻。

また他にも、

彼にとって涅槃は事物ではない。  
そこに無事物は有るのではない。 7

涅槃は事物であると主張する者にとって、無事物は有るのではない。(何故ならば) このように、有る事物を「無事物」とすることは正しくない故であり、そう見るので涅槃は無事物でもない。

また他にも、

もし、涅槃が事物でなければ、  
如何様にその涅槃は依拠したものではないのか。  
依拠したものではない、  
無事物は有るのではない。 8

もし、涅槃は事物が有るのではないと主張するならば、「その涅槃は依拠した  
ものではない。」と言ったことは不合理である。何故かといえば、依拠したの  
ではない無事物であるものは、何も有るのではない故であり、そう見ることに  
よって、涅槃は無事物でもない。

涅槃が事物として有る・無いの、それぞれの極辺を主張することを否定する>

[二極辺を捨て去った涅槃を何処におくか]

言う。「ならば涅槃はどのようなものであるか述べたまえ。」

説く。

来て、行く事物は、  
依拠するか、因を為したものである。  
それは依拠したのではなく、因を為してではない。  
涅槃であると示された。 9

誤りを悟らぬことによって、諸蘊が依拠するか因を為したものである、来て  
行く事物そのものが誤りであるので、依拠したのではなく、因を為したの  
ではないことによって諸蘊が起こらないことを、涅槃であると示された。

涅槃が事物として有る・無いの、それぞれの極辺を主張することを否定する> [二極辺の見解を教示者が叱責する方法]

また他にも、

諸々の起や壊を、  
捨て去るよう教示者が御言葉を賜れた。  
それ故に、涅槃とは  
事物でなく、無事物でないと正しい。 10

世尊が、諸々の起と壊を捨て去るよう御言葉を賜れたので、それ故に、涅槃  
とは事物でもなく、無事物でもないと正しい。

涅槃が四つの極辺として成立したことを否定する> [その二つの極辺を主張することを否定する]

ここで言う。「ならば涅槃は、事物と無事物の双方ともである。」

ここに説く。

もし、涅槃が、  
事物と無事物の双方であるならば、  
事物と無事物であるものが、  
解脱となることは、正理ではない。 11

もし、涅槃が事物と無事物の双方ともであるならば、そう見れば事物と無事物であるものが解脱であるとなるので、それも正理ではない。(何故ならば) 互いに反する二つが同時に一つであることはあり得ない故である。

また他にも、

もし、涅槃が、  
事物と無事物の双方であるならば、  
涅槃は依拠していないのではない。  
それは二つに依拠した故である。 12

もし、涅槃が事物と無事物の双方であるならば、そう見れば涅槃は依拠していないのではなくなる。(何故ならば) その涅槃は事物と無事物の二つともに依拠した故である。それは主張しないので、それ故に「涅槃は事物と無事物の双方である。」というそれは、正理ではない。

また他にも、これ故に正理ではなく、

もし、涅槃が、  
事物と無事物の双方であるならば、  
涅槃は無為であり、  
事物と無事物は有為である。 13

涅槃は、事物と無事物の双方であるとは不合理である。何故かといえば、涅槃は無為であるが、事物と無事物の二つは有為である故である。そう見るので、この因の一部特性によっても、涅槃が事物と無事物の双方であるとは正しくない。

ここで言う。「涅槃は事物と無事物の双方でもないが、その二つが有るものが、涅槃である。」

ここで説く。

もし、涅槃に、  
事物と無事物の二つが有るならば、  
その二つは一つに有るのではなく、  
光と闇の如くである。 14

涅槃に事物と無事物の二つが有るとも不合理である。何故かといえば、互いに合致しないその二つが一所に同一時に一緒に有ることは正しくない故であり、例えば光と闇の如くであるので、それについて「それに事物と無事物の二つが有るものが、涅槃である。」と言ったことは正しくない。

涅槃が四つの極辺として成立したことを否定する > [双方でない極辺を主張することを否定する]

ここで言う。「涅槃は事物でもない。無事物でもない。」

ここで説く。

事物でなく無事物でないものを、  
涅槃であると示すものは、  
無事物と事物の二つが  
成立したならば、それは成立するとなる。 15

君が「涅槃は事物でもなく、無事物でもない。」と言ったことは不合理である。何故かといえば、「事物でもなく無事物でもない」と明らかで、捉え、働く心であるものは、無事物と事物の二つが成立したならばそれも成立するとなるのであるが、それら無事物と事物が成立していないので、それ故に「涅槃は事物でもなく、無事物でもない。」というそれは不合理である。

また他にも、

もし、涅槃が、  
事物でなく無事物でなければ、  
「事物でなく無事物でない」と、  
何ものがそれを頭かにするのか。 16

もし、涅槃が事物でもなく、無事物でもないのであれば、事物でもない無事

物でもないそれらは無く、それらが無い故に、「事物でもなく無事物でもない涅槃」と、何ものがそれを顕かにし、定義し、認識し、決定しようか。そう見るのであれば、「涅槃は事物でもなく、無事物でもない。」というそれも正しくない。

それより他の方法で語ることを否定する> [涅槃を会得したものが四つの極辺として成立していないと示す]

これ故にも涅槃は不合理であり、如何様にといえば、

世尊は涅槃を得てから、  
「有る」と顕かではない。その如く、  
「無い。」あるいは「双方」か、  
「双方ではない」と顕かではない。 17

世尊は留まられたとしても、  
「有る」と顕かではない。その如く、  
「無い。」あるいは「双方」か、  
「双方ではない」とも顕かではない。 18

何故ならば、世尊が涅槃を得られたか、留まられたとしても構わないが、「有る。」か「無い。」か「有ることも有るが、無いことも無い。」か「有るのでもない。無いのでもない。」と顕かではなく、定義されることも無く、認識されることも無く、名付けられることも無い故に、涅槃も名付けられるものとして無く、それが無ければ、涅槃は誰のものであるとなろうか。そう見るのであれば、一切の様相としても、涅槃は不合理である。

それより他の方法で語ることを否定する>それによって成立した意味> [輪廻と寂滅が平等性であると成立した]

また他にも、

輪廻は涅槃より、  
違いは僅かにも有るのではない。  
涅槃も輪廻より、  
違いは僅かにも有るのではない。 19

ここで、蘊の継続に依拠して「輪廻」と名付けられるならば、それらの蘊は自性が欠如する故に、如何様に永遠に生が無く、滅が無い主体であるのかを吾輩が全く最初に既に示したので、それ故に一切法（現象）は生が無く、滅が無いことがまさしく等しいことによって、輪廻は涅槃より違いは僅かにも有るの

ではない。斯様に輪廻は、涅槃より違いが僅かにも有るのではないが如く、涅槃も輪廻より、違いは僅かにも有るのではない。

涅槃の果てであるものは、  
それは輪廻の果てであり、  
その二つの僅かな違いは、  
非常に微かにも有るのではない。 20

涅槃と、輪廻の正しい果てと、無生の果てと、正しい究極の果てであるそれらは、認識されるものとして無いとまさしく等しいことによって、非常に微かな僅かな違いも有るのではない。

それによって成立した意味 > [無記の見解の否定が成立した]

滅したことや、果て等や、  
恒常である等の緒見解は、  
涅槃と、後の果てと、  
前の果てに依拠したのである。 21

「如来が滅されてより有る」と「無い」と、「有ることも有るが無いことも無い」と、「有るのでもなく無いのでもない」と見解するものや、「世間は果てが有る」と「世間は果てが無い」と、「果ては有ることも有るが、無いことも無い」と、「果ては有るのでもなく、無いのでもない」と見解するものや、「世間は恒常である」と「世間は無常である」と、「恒常も恒常であるが、無常も無常である」と、「恒常でもなく、無常でもない」と見解するものであるそれらは、順次に涅槃と、後の果てと、前の果てに依拠したのである。

そこで、

一切の事物が空であることにおいて、  
果てが有るとは何か。果てが無いとは何か。  
果てと果て無しとは何か。  
果てでなく果て無しでないとは何か。 22  
そのものとは何か。他とは何か。  
恒常とは何か。無常とは何か。  
恒常と無常の双方とは何か。  
双方でないも、何ものであるか。 23



返答> [そのように否定したことにおいて、経証との矛盾を排斥する]

一切の認識対象が寂滅し、  
戯論が寂滅し、寂静である。  
仏陀は、何処においても、  
誰にも、如何なる法も示していない。 24

涅槃を考察する> [章の名を示す]

「涅槃を考察する」という第二十五章である。